

heisei16

六花

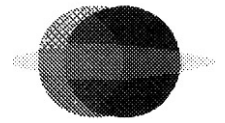
Rikukwa haikukai

3

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
風 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

designed by Asuka

訪戴



山田六甲

一万歩歩いて梅の城に着く
末黒野に雲古大盛りしてありぬ
バレンタインデー大きな金貨チョコプレート
指なめてトロリトロリバレンタインデー
バレンタインデーチョコをつまみし指なめる
還暦の祝と梅の薫りけり

早咲きも遅咲きも梅にほふかな
笹鳴きや黄色い壁の家が建ち
壊れしは壊れし形なまりに薄氷
露地裏の奥がもつとも春めきぬ
蛇穴を出る石垣に元さんが
骨接ぎは骨が折れます春スキー
誰にでも話しかけるよ春の土
風笑ふもうすぐややのできさうで
春雨に濡れて第九の怒濤展

六 郷 集

朧 月

中 村 房 枝

柱 あ る 家 に 帰 り ぬ 朧 月
鬪 鶏 の 来 賓 席 の パ イ プ 椅 子
膝 つ け よ 肘 も つ け よ と 野 の 遊 び
雛 壇 の 目 玉 の 数 や 夕 ま ぐ れ
三 月 の 水 な き 橋 を 渡 り た る

春

松 山 律 子

春 で ん な 人 畜 共 通 感 染 症
何 時 ま で も 確 定 申 告 せ に や な ら ん
淡 島 の 雛 に 似 合 わ ん 付 き 人 も
月 斗 忌 が 俳 句 の 作 り 初 め で す
大 仰 に 風 邪 ひ く 鳥 も ラ イ オ ン も

六 郷 集

冬 紅 葉

二 瓶 洋 子

紅 葉 見 に 行 か ず と も よ し 庭 楓
生 り 年 の 落 つ る 花 梨 を 顧 み ず
相 撲 取 る な 替 え し ば か り の 畳 な り
何 ひ と つ 変 ら ず 過 ご す 神 の 留 守
冬 紅 葉 わ が 晩 年 の か く あ り た し

玉 子 酒

鳴 海 清 美

冬 空 へ 看 板 灯 さ れ る て 真 昼
編 針 の ひ と 目 ひ と 目 の 隙 間 か な
翌 朝 の 目 覚 め 託 せ り 玉 子 酒
敷 石 の く ぼ み 真 四 角 帰 り 花
冬 め く と 引 き 寄 せ ら れ て 花 屋 の 灯

症状を云つて冬田を向きしまま 三井 孝子

柿紅葉昔ながらの川に散り

ちちろ鳴く溜池の底地割れして

気休めに押さへし梯子松手入

しまひには紅葉を見ずに喋りぬし

医者が病状を患者に伝えて窓外の冬田を向いたのではなく、病人亦是家族に症状を訊いたところ、病人はこの句のような態度をとったのだ。病人本人が言葉に出せば、涙声になるのか、言葉にでないのか、絶句しているのか、読者としてはあれこれ想像して、病人の身内のような気分させられてしまうのだ。なんとも悲しい場面ではないか。冬田の季語幹旋が付きすぎたかとも思えるが、そういう情景が鮮明に見えてくるのだからこれで佳い。

橙木集

同人自選

順不同

草堂斬西無樹林

非子誰復見幽心

飽聞橙木三年大

与到溪辺十畝陰

杜甫

冬田

三井孝子

病状を云つて冬田を向きしまま
柿紅葉昔ながらの川に散り
ちちろ鳴く溜池の底地割れして
気休めに押さええへし梯松手入
しまひには紅葉を見ずに喋りぬし

春炬燵

水谷ひさ江

臥竜梅極楽橋を二度渡り
心字池おどろおどろに寒の鯉
奔流を避けて留まる大水柱
大寒の屋根に三日月引掛り
美術館巡りしてゐる春炬燵

六花集

平居 滯子

会員自選

遠嶺より山の眠りの深まりぬ
熱爛や耳朶美しき女なりし
勾玉のごとき胎児や冬うらら
冬夕焼妊もりし娘の逆光に
冬日向憎まれ口のたどたどし

横山 迪子

中谷喜美子

格子戸にメモはさみあり冬の朝
漱石忌読みふけりたる文庫本
寒風に乱髪となる駅ホーム
冬帽子ブーツすらりとノーメイク
袖無しで出る鼻歌はろくでなし

カーナビの声聞き流す年用意
年暮るる父の齢は九十六
十二月らしき日よりと予報官
二人には小さき傘や初時雨
ばあさんも子も孫も呼ぶ大蕪

射場 智也

湯呑から寒さうに湯気小津映画
裸木に時待つ形ありにけり
灰皿の菓子屑焦げる聖夜かな
寒の鯉検査結果は太り過ぎ
鈍行の常連さんや毛糸編む

林 裕美子

干柿に朝日集める軒場かな
シッターの音小気味良くお餅つき
曲り角ふりむく吾子に冬の風
ちやぶ台の広くなりたる師走かな
年越の寝息きこえる映画館

菊谷 潔

ちちよちち寒き姿や冬立ちぬ
手のまつか鼻のまつかに雪はらひ
耳鳴りの他に音なし銀世界
風流の極みは寒き今朝の雪
木枯や座頭の途のはかどらず

鳥川 昌実

枯野原生れ生まるる風の道
揺れつつも裸木伸びる先確か
冬の水深きに深き光あり
毛糸編む思いの起伏あからさま
冬籠羽毛のようなピアノの音

菜根譚



六甲

朝方は風もびたりと止むが、冬の朝は温度も急降下して冷え込む。作者が表に出てみると、格子戸に一枚のメモが挟んであった。メモの主は作者の寝ているうちに訪問してきたのだろうか、もしくは作者が夜間外出して戻ってきた時に暗がりでもメモに気が付かなかつたとも解釈できるが、それは夜か、早朝か、何れにしても人間の出にくい寒さ厳しい時間帯であったにちがいない。そういうことを想像させてくれる句。冬帽子ブーツすらりとノーメイク袖無しで出る鼻歌はろくでなしも佳い。

勾玉のごとき胎児や冬うらら

平居 濤子

胎児の形容を勾玉に比喩した句。だがそれだけでは解釈がまだ半分で、玉という言葉に注目しなければいけない。そうです、「玉のような赤ん坊」という言葉がありました。作者はそこまで計算して作ったかどうかは問題ではない。そこまで味わうように努力しよう。冬夕焼妊もりし娘の逆光にも良い。

格子戸にメモはさみあり冬の朝

横山 迪子